

言語研究における《女性性・男性性》という概念について —現代日本語の言語使用実態に基づく概念規定の試み—

任 利

1. はじめに

現代日本語においては、女性と男性それぞれの性別に特徴的な語彙や言語運用があり、使用者の性別による言葉遣いの違いが従来から指摘されている。言語使用におけるこのような性差をどのような視点・方法で捉えていくのかは非常に興味深い問題である。言語使用実態、例えば、音声、文法、語彙、表現、文体、表記などの各面に男女の使用差がどのように現れているのか、という使用現象の記述的研究に比べて、理論的研究の方が立ち遅れているようである。とはいえ、先行研究の言説には重要な示唆が含まれていることも確かである。本稿では、先行研究の知見を踏まえた上で、従来のいわゆる「女性語・男性語」という二項対立的な視点より、言語における性差の多様性に基づいて、度合いの差で性差を捉える視点が有効であると考え、多様な性差現象を包括できるもっと柔軟なカテゴリーとして《女性性・男性性》の概念を規定する。

2. 言語における性差に関する見解

2.1 「女性語・男性語」

従来日本語における性差の研究では、話し手の性別による言葉遣いの違いという問題が多くに関心を集めてきた。つまり、言語表現主体が女性であるか男性であるかということに注目して、それぞれが使用する言語形式を「女性語・男性語」というカテゴリーに分けて、言語上の性差の記述と分析が行われてきた。

「女性語・男性語」という概念はよく使用されるが、確定的な定義がないままに、各研究者が似たような言説を便宜に措定することで、定説化してきたというような背景がある。しかしながら、おおよその了解というのはもちろ

んある。例えば、一般的な辞書や用語事典の類では、(1) (2) (3) のように定義されている。そして、「男性語」という項目の解釈は「女性語」ほど多く見られない。

(1) 『広辞苑』（第五版、岩波書店p. 1347）

【女性語】単語・文体・発音などにあらわれる女性特有の言いまわし。平安時代には漢語を避けた表現としてあったが、特に室町時代以降の女房詞・遊女語などで顕著に見られた。現代語でも、接頭語の「お」、終助詞の「よ」「わ」、間投助詞の「さ」「ね」のほか、語彙・発音の面でも見られる。婦人語。

(2) 『日本語学キーワード事典』（朝倉書店p. 233-234）

【女性語】女性が主として使う固有な語や表現をさす。その対極としての「男性語」がある。男性語は主として男性の使うことばである。

(3) 『大辞林』（第二版、三省堂）

【女性語】女性特有の言葉、あるいは表現。終助詞の「の」「よ」「わ」「かしら」、感動詞の「あら」「まあ」、接頭語の「お」、敬語の「ませ」「まし」などの類。古くは宮中・斎宮・尼門跡・遊里などに特有の女性語があった。婦人語。（p. 1267）

【男性語】男性特有の言葉、あるいは表現。「俺」「お前」「君」、終助詞の「ぜ」「ぞ」、感動詞の「おい」「こら」などの類。（p. 1608）

日本語に観察されるバリエーションに関する研究の中でも、話し手の性別による言葉遣いの違いという問題は、特に多くの関心を集めてきた問題の一つである。実際の言語運用や史的変遷を観察している記述的研究の中にも、「女性語・男性語」を改めて定義しないまま、分析を進めているものも多く見られる。このような研究では、おそらく上記で引用した定義が前提とされているものと思われる。

このような研究が成立する背景には、いわゆる「女性語・男性語」あるいは「女ことば・男ことば」という二項対立的な視点が存在する。

2.2 二項対立的視点とその問題点

従来のいわゆる「女性語・男性語」という二項対立的な視点は、簡単に図で示すと、(4)のようになる。

$$(4) \quad \boxed{\text{女性語}} \Leftrightarrow \boxed{\text{男性語}}$$

(4) から分かるように、二項対立的な見方では、女性と男性のことばは共通の部分がなく、互いにあらゆる点で対極的で全く異なる存在とされている。二分された女性と男性のことばは互換性や連続性、中間的な領域が一切認められない二者択一の関係となる。

いわゆる「女性語・男性語」あるいは「女ことば・男ことば」という枠組みで性差を捉える背後には、女性だから「女性語」を用い、男性だから「男性語」を用いる、あるいは女性が使うことばは「女ことば」であり、男性が使うことばは「男ことば」である、という前提が存在している。

また、生物学上の性別の違いから言語上の性差が生じるという考え方や、女性が使用することばと、男性が使用することばとは根本的に異なっているという見方も窺われる。すると、女性と男性のことばに存在する類似性が見えなくなる危険性があり、言語上の性差は絶対的、不変なものであるという誤解を招いてしまう恐れがある。

言語使用の実態を観察してみると、言語表現が言語表現主体の性別と必ずしも固定的に強く結びついていないケースが多いことが分る。即ち、言語上の性差には、これまでの「女性語・男性語」の枠組みでは扱いきれない範囲のものがある。言語における性差というものは、単純に二分されるものとは言い切れないわけである。実際の言語使用に現れる性差は、使用者の生物学上の性別による部分も大きい、そのあり方は性にに基づく二分法としての「女性語・男性語」を超えてもっと複雑で多様である。

したがって、言語上の性差の全体像を把握するために、多様な性差のあり方を包括できるもっと柔軟な枠組みを設定する必要があると思われる。

2.3 示唆に富む言説

言語における性差の研究が抱えている重大な課題の一つは、二項対立的な視点に代わる新たな視点を提示するということである。この問題については、先行研究から、示唆的な言説を見出すことができる。以下では、先行研究において示唆されることについて整理する。

(5) Bodine (1975:131)

A possible explanation is that the forms which were described under the rubric “men’s and women’s languages (or speech)” were generally exclusively used by either one sex or the other. This type of differentiation, which may be called sex-exclusive differentiation (中略) Differences in frequency of occurrence of any form between the speech of women and men, which may be called sex-preferential differentiation. [下線は引用者による。以下同様。]

(6) 井出・川成 (1984:32)

ことばの性差には、二つの種類があることを注意しておかなければならない。一つはどちらか一方の性によってのみ使われる絶対的なもので、もう一つはどちらかの性により多く使われる傾向にあるものである。絶対的男／女性語とは、日本語の男が使う一人称代名詞「ぼく」や女性が使う「あたし」のように、どちらかの性に特有のものをいう。一方、相対的男／女性語とは、日本語の「すてき」のように、どちらかの性により多く使われる傾向にあるものをいう。

(7) 益岡・田窪 (1989:201)

話しことばでは、男性が主に使う表現と女性が主に使う表現があり、かなり体系的な区別がなされる。この区別は、言語表現上のもので、男性的表現を男性が、女性的表現を女性が使うという絶対的なものではない。男性が女性や子供に話す場合は多少女性的表現を使うこともあるし、女性同士が話したり、女性が目下のものに動作の要求するような場合、男性的な言葉遣いをすることもある。また個人差も大きい。

(8) 鈴木(1989:1)

日本語の談話においては、男性の発話と女性の発話には大きな違いがあるが、男性用と女性用の二種類の日本語が並列して存在しているわけではない。聞き手と話し手の融合・協調を基本とした女性的発話と、聞き手と話し手との境界をはっきりさせ、指示・命令・断定・意志の表明などを基本とした男性的発話が連続して存在しており、その中間には男女どちらにも使用される言い方がかなり広い範囲にわたって存在している。

(9) 高崎(1996:47)

A女性専用とされる言語形式・表現 B女性が多用するとされる言語形式・表現 N(neutral)性に無関係に使用される言語形式・表現 C女性が普通あまり使わないとされる言語形式・表現 D女性がほとんど使わないとされる言語形式・表現

(10) 寺田(2000:171)

ある文末表現を男性語と女性語のどちらかに分類する際、次の4つに分類するのが適当だと思われる。①女性だけが使用し、男性は使用しない絶対女性語②男性だけが使用し、女性は使用しない絶対男性語③男性よりも女性が多く使用する傾向のある相対女性語④女性よりも男性が多く使用する傾向のある相対男性語

上記のように、従来の「女性語・男性語」という二項対立的な見解に疑問を呈する論考が散発的に見られる。これらの研究は言語における性差の本質を考える上での多くの示唆を富むものである。

3. 《女性性・男性性》の概念規定

前節で見てきたように、先行研究の知見は、多くの示唆に富むものであるが、用語や概念の形式が異なり、各見解が並行的な言及に留まっている。そこで本節では、先行研究に共通する主張を抽出し、それらを基に《女性性・男性性》の概念規定を試みたいと思う。

先行研究が共有していると思われる考えは、端的に言えば、言語における

性差は「絶対的ではなく相対的」であり、性差を「連続性」として捉えるといった視点である。特に後者は重要であり、「連続性」という特性は言語上の性差を捉える上で大きな鍵になると考えられる。

本稿ではこのようなキーワードを基に、『女性性・男性性』の概念を次のように規定したいと思う。ポイントを(11)に記す。

(11) 《女性性・男性性》の概念規定の試み

a女性の言葉遣いと男性の言葉遣いは、対極的存在ではない。

b程度としての女性性・男性性の強弱によるものである。

c性差（女性・男性による差違）というより、女性性・男性性の度合いの差（性度）といえるものである。

d話し手の女性性・男性性の表出は自己表出意識、対話ストラテジー、社会通念、性ステレオタイプなどによって多様に実現される。

上記の(11)のa~dを詳しく説明してみよう。

女性と男性の言葉遣いは、対極的存在ではなく、程度としての女性性・男性性の強弱によるものである。つまり、極端に女性性の強い言語表現（＝いわゆる「絶対女性語」）という軸と、極端に男性性の強い言語表現（＝いわゆる「絶対男性語」）という軸を立てれば、実際に使用される言語表現形式は、この両極端の間のどこかに位置づけられる。性差（女性・男性による差違）というより、女性性・男性性の度合いの差（性度）といえるものである。

上記(11)の概念規定を図で簡略に示すと、(12)のようになる。

(12) $\longleftrightarrow$

言葉遣いの上での女性性

言葉遣いの上での男性性

前節の図(4)は、女性と男性の言葉遣いは、全く異質なものであり、「女性語・男性語」という独立したカテゴリーが存在することを示しているが、図(12)はそのような独立したカテゴリーの存在を否定していることになる。

女性性と男性性が両極に位置する一本の連続線で表すことのできるものと

仮定し、具体的な各言語形式はその連続線上の間のどこかに位置づけられることになる。女性性と男性性との間には負の相関があると仮定される。つまり、強い女性性は必然的に弱い男性性をもつことを意味し、弱い女性性は必然的に強い男性性をもつことを意味する。女性性と男性性の線上の中間に位置するのは、ニュートラルな形式であると見なされる。

例えば、「かしら」と「かな」という二つの終助詞について、従来「かしら」は女性語、「かな」は男性語と分けるが、本稿の立場では、「かしら」は女性性の強い言語表現形式、「かな」は男性性の強い言語表現形式とする。

ただし、《女性性の強い》《男性性の強い》という言い方をしても、生物学上の女性は《女性性の強い》表現、男性は《男性性の強い》表現を必ずしも使用するわけではない。《女性性・男性性》の強い表現とは使用者の生物学上の性別に強く結びつく固定的・不変なものではなく、可変的なものである。

使用者がどのように見られたいか、という自己表出意識によって、特定の言語形式を選択して使用すると考えられる。いわゆる社会通念上の「女らしさ」「男らしさ」という概念はこれ自体、批判の対象になるが、社会通念上の「女性」の一面を積極的に出す場合、「やさしさ・婉曲」のニュアンスを含む女性性の強い言い方をし、「男性」の一面を積極的に出す場合、「たくましさ・率直さ」を含む男性性の強い言い方をし、というように、言語運用の面では、言語形式の性差は《女性性・男性性》の表出の度合いの差で捉えられると考えるのである。

言語運用は、話の場面や話し相手によって多様に実現されるものである。言語運用の面では、積極的にいわゆる社会通念としての女性・男性、また、社会の求めている「女らしさ・男らしさ」に従い、言語表現を選択する一方、そうでないこともありうる。則ち、言語表現主体としての女性及び男性は、「女性はこういう話し方をすべき、男性はこういう話し方をすべき」という社会で通用している社会通念や女性・男性のステレオタイプの言い方に合わせたことばのみを選択して用いるケースもあるし、言語ストラテジーとして、これと逆のケースも考えられる。また、それぞれ性ステレオタイプの言い方を知識として持っていて、自らの言語行動としてそれらに即して実現さ

れない場合もありうる。

4. 今後の課題—結語にかえて—

以上《女性性・男性性》という《度合い》の概念を具体的な現象に適用し、その作業を通じて、《度合い》の概念をさらに精密にしていくことが今後の課題となるが、次に具体的な課題をあげて結語にかえる。

性差研究に導入した《女性性・男性性》という《度合い》の概念は言語運用の事実に基づいて設けた概念であり、さらに修正する必要があると思うが、今後言語に現れる性差を記述・分析していく上で、有効な概念であると考えられる。特に、日本語のように、性差表出の側面が多様であり、そして、様々な文法形式が性差表示として機能する言語にとっては適用できる概念であると考えられるが、今後、具体的な現象に当てはめていこうと考えている。

例えば、人称代名詞の「ぼく・おれ・わし」「おまえ」「きみ」は男性が用いるものとし、「わたし・あたし・うち」「あなた」は女性が用いるものとされている。また終助詞として、「さ」「ぜ」「ぞ」「な」などは男性的な表現となり、「かしら」「のよ」「わ」「わね」「わよ」などは女性的な表現となる。また、イントネーション上では、上昇調は女性的、下降調は男性的とされている。その他、男性の場合は「めし」「食う」「うまい」「おやじ」「おふくろ」「やってやる」などの言い方がよく見られるが、女性の場合になると、それぞれ「ごはん」「食べる」「おいしい」「おとうさん」「おかあさん」「やってあげる」という言い方に代わる。こうした現象を《女性性・男性性》という概念で説明し直していきたい。

従来、男女の言葉遣いの違いばかりが強調されてきた。現実には、男性語とされる「ぜ」「ぞ」「な」などを女の子が使ったり、女性語とされる「かしら」「わ」などを使う男性も見られる。このような現象を評して、最近若者の言葉遣いに性による境界線がなくなりつつあると言われたり、男性語が女性語化、女性語が男性語化、双方向化、文末形式は男女相互交錯して、ボーダーレスの時代になった、女性が男性語の領域を侵食しているなど、と言われたりする。しかし、いずれも二項対立的な性差の捉え方から脱していないと

思われる。

今後の課題としてはおおよそ以下の二点になると思う。

一つは、上記で述べたように、従来「女性語・男性語」から説明されてきた各言語表現形式は本稿で提示した《女性性・男性性》という《度合い》の概念で捉え直すこと。

もう一つは、話し手の女性および男性はなぜ上記のような表現を選ぶのか、あるいは選ばないのかという問題を解明しなければならないということ。

ことばはコミュニケーションの手段という側面を持つ。言語は情報を相手に伝えると同時に、言語表現の選択により話し手は自分がどのような属性のものであるのかというアイデンティティを積極的に、あるいは消極的に示すことも行っている。日本の社会では、男性には「たくましく」「率直」という男性像を求め、女性には「やさしく」「丁寧」という女性像を求める。男性・女性に対する期待とイメージは異なる。その結果として、ことばに投影されていると思われる。

しかし、言語表現主体が個人の意識と行動を具体的に表現するとき、言語形式の選択を通してどう見られたいのか、という自己表出意識の度合いの差が見られる。積極的に自分の性に合わせたことばのみを選択して用いるのではない。従来のいわゆる「女性語・男性語」はそれぞれの性別と結びつくニュアンスが生まれる。このような表現をつけると、それぞれのニュアンスを獲得することができる。個人のアイデンティティが実現される。

《女性性・男性性》という《度合い》の概念規定に従えば、多様な、相互に関連する女性と男性のことばの現象を視座に入れることができる可能性があると思われる。

以上、本稿では、先行研究の知見を集積し、また性差表出の多様性という言語使用事実に基づいて《度合い》の差という概念によって、《女性性・男性性》の概念規定を試みた。本稿の議論では、より厳密な形式化を提示するに至らなかったが、これまで、《女性性・男性性》の一般化、共通見解の提示が立ち遅れていた性差研究においては、《女性性・男性性》の概念規定を検討する本稿の試みは、段階的であれ、今後の性差研究の展開に資することが期待

されるのではないと思われる。

今後、実際の言語現象に適用し、その作業を通じて、《女性性・男性性》という概念を見直し、必要な修正を施していきたいと思う。

【参考文献】

- 井出祥子・川成美香(1984)「日本の女性語・世界の女性語」『言語生活』387号 筑摩書房
- 金水 敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 鈴木 睦(1989)「いわゆる女性語における女性像」『近代』67号 神戸大学
- 高崎みどり(1996)「テレビと女性語」『日本語学』15巻10号 明治書院
- 寺田智美(2000)「明治末期の女性語について―夏目漱石の小説にみえる「絶対女性語」の考察―」『紀要』13早稲田大学日本語研究教育センター
- 中村桃子(2001)『ことばとジェンダー』勁草書房
- 任 利(2003)「終助詞「かしら」における男女差の形成―近代小説における用例調査を中心に―」『筑波日本語研究』8号 筑波大学
- 任 利(2005a)「明治30年代の小説における性差と文末表現」『日本語と日本文学』40号 筑波大学
- 任 利(2005b)「言語研究における《女性性・男性性》の概念規定」現代日本語研究会第14回夏のワークショップ研究発表資料 於ヌエック国立女性教育会館 2005年8月3日
- 益岡隆志・田窪行則(1989)『基礎日本語文法』くろしお出版
- Bodine, Ann (1975) Sex Differentiation in Language. Barrie Thorne & Nancy Henley eds. *Language and Sex: Difference and Dominance* Rowley, Mass: Newbury House

(にん り)